島田司巳さん

（滋賀医科大学 名誉教授、
社会福祉法人グロー（ＧＬＯＷ）顧問）

広島県生まれ。医学博士。滋賀医科大学名誉教授。社会福祉法人グロー（ＧＬＯＷ）顧問。滋賀県立むれやま荘特別顧問。京都府立医科大学にて学ばれ、現在も医師として活動されています。当初は、結核の専門医を目指しておられた先生でしたが、インターン時の出会いや、当時の時代の流れなども相まって、小児神経学を専攻するようになられます。滋賀医科大学に赴任し、後進の育成にもあたられる一方で、岡崎英彦氏（①）との出会いから、びわこ学園へも出向かれるようになり、同大学の小児科医の卒後研修課程に、同学園での実習を組み入れるなど、多くの功績を残しておられます。また、平成二五年度には、糸賀一雄記念賞（②）を受賞されました。

結核に対する思い

齋藤　まず、先生がこれまでどんな人生を送ってこられたか、今、ここにいらっしゃるまでのお話をおきかせください。

島田　私は、昭和九年に、広島県の福山市に近い農家に生まれました。男ばっかり三人兄弟です。私が一～二歳の頃、父親が結核で長患いをしました。昭和一二年前後ですからね、結核療養所など殆どなかった。また、健康保険等もなく、そのため、医療費はすべて自費だったのです。戦後は国立療養所が各地にできましたが、戦前は軍関係者中心の療養所だったので一般の人は入れなかったのです。なので、父は京都の民間療養所に入院していました。しかし、三か月ほど入院すると、田畑一反を手放すくらいの費用がかかるんですね。親戚筋からは「実家をつぶす気か」と言われて、おふくろも泣く泣く父を家に連れ戻した、そんな時代でしたね。

父は、私が三歳の時に亡くなりました。そのあとは借金も返さなくてはならないし、僅かの田畑を一生懸命に耕して頑張りました。そのうち、第二次大戦が始まると、食糧難で、農家には、収穫した米や麦を、国が決めた価格で強制的に差し出させる制度、「供出」というのがありまして、手元には半分も残りません。その残りで生活するわけです。日頃は、食事も麦飯を主食にして、米は現金や借金返済のために節約していました。

昭和二十年、敗戦になるのですが、その頃に、兄たちが上の学校へ進みましてね。当時の農家では、長男が実家を継ぎ、次男や三男は家を出るという時代でした。けれども、おふくろは、長男を京都府立高等農林専門学校（現・京府大農学部）に、次男を山口高等商業専門学校（現・山口大学経済学部）に行かせたんです。

ところが、我が家はもともと結核の系統だから、兄貴は二人とも結核になりました。その頃には国立の療養所が各地にあり、二人は前後して国立広島療養所に入院し、幸いよくなりました。実は、私も、高校の頃にレントゲンを撮ったところ、既に治った痕の古い影が見つかりました。知ら

①岡崎英彦氏・・・一九二二～一九八七。一九四八（昭和二三）年、近江学園の園医となられました。一九六三（昭和三八）年、びわこ学園開設と同時に初代園長に就任されました。

②糸賀一雄記念賞・・・糸賀一雄氏の心を受け継ぎ、障害者やその家族が安心して暮らせる地域社会の実現に向けて、障害者福祉の分野で顕著な活躍をされている個人および団体に対して贈られるもの。

ないうちに結核をやっていたのですね。

この頃から、国民病ともいうべき結核を治す医者になれたらと思うようになりました。私が育ったのは尾道と福山の中間の村で、海も近いのでね。一キロくらい離れたところに島があり、浜辺に松林もあって、海もきれいで、結核療養には最適の環境と思いました。医者になって結核療養所をそこに作れたらいいなあ、なんてことを思い描いていました。

でも、とても医学部へは行かせてもらえないだろうなと思っていたんです。ところが、ある時母に話をしてみたら、「まあ、少し考えてみるわ」なんて言ってくれましてね。私が高校に入る頃には、二人の兄は農林省と銀行に勤めていましたので、僅かずつだけど私の学費を応援してやろうということになって、希望が湧いてきました。ただ、それには条件がありましてね。一つは国公立であること、それから奨学金の貸与を受けること、今一つ、おふくろが一人で農業を続けることになるので、可能な限り、農繁期には戻ってきて手伝うということでした。それらを承知し、何とか京都府立医大に進むことができました。

その頃、福山市一帯は備後表（畳表）の材料となるイ草の産地で、我が家もイ草を栽培していて、それが私の学資にもなりましたね。ちょうど、戦後の復興期でしたから、建築資材として畳表の需要が高く、イ草も高値で売れたんです。イ草は七月中旬からの約二週間が収穫です。イ草は日中に刈り取ると色があせるので、日没後に刈ります。それを、白土を溶かした泥水に漬けて染めるのですが、その作業が終わるのは夜中になります。翌朝は、三時前に起き、日が昇るまでに、泥水で染めたイ草を干し終えるのです。雨に濡れると変色するので、にわか雨は大敵です。

齋藤　なかなか重労働ですね。お一人で作業されてたんですか？お母さんと二人でしょうか？

島田　瀬戸内の島から若い衆を一人と、娘さん数人を雇います。この人たちは、雇い主のペースに合わせて動きますから、私が率先して働かなくてはならないのです。色と匂いのよいイ草に仕上げるために、早朝から深夜に及ぶ、まさに重労働でした。この時期は大学の中間試験が終わった直後ですから、寝不足は堪えましたね。

ところで、前にも述べましたように、結核医療を目指して大学に入ったのですが、卒業の頃には、結核はかなり減ってきました。特効薬ができ、生活環境が改善しましから。そのため、国立療養所の結核病棟にも次第に空きベッドが増えてきたのです。その後になりますが、水上勉氏（③）が「拝啓、池田総理大臣殿」という公開文を中央公論に載せて話題になりました。水上さんは、当時、わが国で初め

ての重症児施設である島田療育園（④）をみられ、その窮状を例に、国の障害児施策の欠陥を指摘されました。それで、国がやっと動き出したんです。また、国立療養所の結核病棟が重症心身障害児達に転用されるのを促す契機にもなったと思っています。水上勉氏は脊椎破裂（二分脊椎）で、重度な障害のある娘さんをお持ちだったのです。島田療育園はびわこ学園よりも一～二年早くできましたかね。その後も、この子を残しては死にきれない、という重症児の親たちの声もあり、結核療養所が次々と重症心身障害児病棟へと変って行ったわけですね。

齋藤　国立紫香楽病院（⑤）の重症児病棟も、そのような経過を辿っているんですね。

島田　そういうことです。結核を何とかしなければ、と思っていましたが、結核よりも重障児の方がより重要な社会問題となってきたのです。

齋藤　先生は、どこで初めて重症心身障害のある方とお会いになったのですか？

島田　インターンで、東京の虎の門病院に行き、小児科病棟に配属されていたときです。そこには、重い障害のある子が何人かおられました。当時はこの子達に対する特別な治療手段もなく、ただ寝かせておくだけで、家族は悲観に暮れておられました。結核の治療を志していましたが、その頃から小児神経をやろうと思い出しました。やがて、一年経って京都府立医大に戻り、小児神経をやりたいと教授に申し出たんです。その頃は、小児医療と言えば感染症とか、栄養障害、腎疾患、小児がんなどが主な治療対象になっていましたから、小児神経などを志す者は非常に少なかったですね。ただ、幸い、教授はよくわかっておられ、これからは小児神経も重要になってくると思われるので、君がやってくれるとありがたいと励まして下さいました。

米百俵の精神

齋藤　学生の頃の印象深いエピソードとか、何かありますか？

島田　母親からお金が送られてくると、ああ、また米櫃の

③水上勉氏・・・一九一九～二〇〇四。日本の小説家。
④島田療育園・・・現、島田療育センター。一九六一（昭和三六）年、日本で最初の重症心身障害児施設として開設されました。
⑤国立紫香楽病院・・・独立行政法人国立病院機構紫香楽病院。昭和一六年、県立結核療養所として創設。昭和四九年、重症心身障害児病棟（やまびこ）が設置されました。

お米がこの金に変わったのだなということを思って、財布の紐は堅くなりがちでした。そのため、図書館にいることが多かったですね。四回生の頃からはアメリカの医学に憧れましてね、アメリカ文化センターというところの図書館にもよく通っていました。

五回生の夏休み話です。図書館で英語の医学書を借りて帰省し、読んでいるところへ母がやってきて、「おまえは、線も引かないで理解できるのか」と言うのです。「これは、図書館の本だからそんなことはできない」と返しますと、「買えばいいじゃないか」と言うんですね。買えって言われてもその頃、二～三千円もするような本、到底買えないと思うから、いろいろ言訳するわけです。「買っても二～三ページ読んだら枕にして寝てしまうだけだ」と。すると、「それならちょっと見せてみよ」と、本を手に取って適当なところを開くと「ここを読んで聞かせてほしい」とくるわけですね。そうすると、私は片っ端から辞書を引かないと訳せない。母がそれを見ていて、「素人だから中身は殆どわからないけれども、半ページを訳すのに一〇回以上も辞書を引いていたじゃないか。一〇ページか二〇ページを読めば、何百かの単語を覚えるだろう。それだけで元が取れる。そのあと、枕にして寝てもいいのとちがうか」と言ってね、帰ったら買えよ、と米一升分のお金を強引に持たせてくれたんです。今でも、線を引いた原書を大切に残しています。この一件は、私にとって「米百俵の精神」として、その後に繋がる貴重な教訓となりました。

医者である前に人間であらねばならん

島田　五回生になると臨床実習が始まるのですが、実習が始まって間のない頃、小学校五年生くらいの白血病の男の子を受け持ちました。当時は、白血病と診断がつくと、殆ど半年以内に亡くなられるという状況で、親にも病名を告げていませんでした。何も知らない子供ですから、病気が治ったとき、勉強が遅れたら困るからと言ってね、教科書を持ってきて勉強しているのです。これ見るとね、私も目頭が熱くなりました。また、「僕、治るよね？」と聞かれたら、どう答えてよいか戸惑います。こんなの初めての経験だったから、母にこのようなことを書いた手紙を送っていたようです。

その後、私が助教授になって間のない頃かな。母を喜ばせるつもりで、近く講演で広島に行くと伝えていたのです。それを、母は奢りかけているのではないかって思ったんでしょうね。講演を終えての帰りに、実家で一泊した時のことです。夕食の後、父親の位牌に手を合わせていた時のこ

と、仏壇の引き出しから封筒を取り出したのです、母が。見ると、私が十五年ほど前に送っていた手紙です。「ほれ、この封筒、お前の字だろう。今でも、あの時の気持ちで患者さんを診ているか」と糺されましてね。感激させられました。

また、学生時代に帰省して野良仕事を手伝っていたときのこと、畦道でお年寄りとすれ違ったあと、「今、お前はあの人に頭を下げなかったではないか」と言われたんです。「知らない人だし、目が不自由らしい人だったので」と返すと、「お前は人を見て、頭下げたり下げなかったりするのか！」って叱られて。その時に、「田圃の稲を見てみよ、実っているのはみな頭を垂れているではないか」と。「実るほど、頭を垂れる稲穂かな」っていうのが口癖だったですからね。

そういう教育は医大ではしてくれませんからね。例えば、当直で、深夜に呼ばれて救急室に行き、大した病気でなかったりすると、「何で昼間に連れてこなかった！」なんて怒ったりする医者もいるんです。しかし、親は素人ですからね。私も経験がありますが、自分の児が夜中に熱や咳をだすと、重い病気が潜んでいるのではないかと考え、小児科医でありながら、慌てました。医学知識のない親たちが過度に心配するのは当然のことですね。これが分かるようになると、怒ることはやめようと。自分の子を育てて、初めて本物の小児科医になるとも云われます。あの糸賀一雄先生も、「人は人と生れて人間になる」（愛と共感の教育）と述べておられますが、人間としての医師でありたいものです。

整肢園で得たもの～誰のために、何をするか～

齋藤　大学院生の頃、他に打ち込んでおられたことは何かあったんですか？

島田　大学院の頃は、親から仕送りは当然ありません。奨学金はもらっていましたが、それだけでは足りないからということでアルバイトをするわけです。医局長に相談しますと、小児神経をやりたいということであれば、よいところがあるよ、と言ってね。それで紹介してくれたのが、滋賀県立整肢園（⑥）だったんです。今の小児保健医療センターの前身ですね。京都発六時の電車に乗り、米原からバ

⑥滋賀県立整肢園…昭和三二年に、滋賀県の旧東浅井郡に開設された肢体不自由児施設。現在は、その跡地に、特別養護老人ホームふくら（運営：社会福祉法人グロー）が建っている。

スに乗り換えて、長浜に行き、更にバスを乗り継いで行くのですが、一〇時前くらいに着く。こうして、金曜日の朝に出て、一泊して、土曜の昼から戻ってくるという生活が始まるんですね。

齋藤　週に一回、滋賀に通っていたんですね。

島田　そうなんです。整肢園には、小学生、中学生合わせて六〇人位おられましたね。金曜日の午前中診察して、昼ごはん食べたら、私も海水パンツ姿で、レントゲン技師か運転手さん、看護師さんとで子供たちを風呂に入れるのですが、今思えば、いい勉強になりました。

入浴後は、四時頃から夕食なんですよ。夏場はまだ太陽が高い時刻です。結局、それは、厨房の人たちが五時に帰ろうとすると、何時までに夕食を終えて、片づけることが必要か、ということなんです。誰の立場に立って仕事をしているのかというと、職員自身の立場なんですね。夏など、夕食を終えた後でも、まだ日暮れまでには時間があるから、庭でソフトボールなどで遊びまわるわけです。さぞ、お腹を空かせて寝ているのだろうな、と不憫に思いましたね。

齋藤　先生も、その時間に食べておられたんですね？

島田　いや、我々職員は、仕事が終わった後に食べていたんです。

食事のことだけでなく、子どもの生活面にも多くの問題がありましたね。当時は携帯電話があるわけではないし、緊急時以外は親子が電話で話をすることもできませんでした。また、家族の方が面会に来られるにしても、バスを何度も乗りかえながらの一日仕事になります。当時、車を持っている家庭はほとんどいないわけですから。親の温もりを感じる機会が制限されているような状態です。これは問題だと思いましたね。子どもというのは、身体の機能と共に家族のぬくもりを味わいながら情緒的に育っていくものですから。

その頃は、どこの施設もこんなものだと思っていたけれども、滋賀医大に来て、岡崎先生とお会いし、びわこ学園に関わるようになり、また、福祉の本なども読むうち、近江学園では、昭和二一年当時から、職員が子ども達と一緒に暮らしていた、教師や支援員たちが子ども寝食を共にするということをやっていたわけなんですよね。驚きました。

齋藤　整肢園にいらっしゃっていた頃は、まだ近江学園のこととかはご存知なかったのですか？

島田　ええ、知らなかったです。それを知らなかったことを、非常に残念に思いましたね。しかし、近江学園のことを、駆け出しの頃に知らなかったことが、逆に、整肢園という障害児施設で、初めて経験する様々な疑問や不条理を一層強く印象つけてくれたのだろうと思います。

新幹線も高速もない時代でしたから、僻地にある整肢園には家族も面会に来られないし、麻酔を必要とする手術を、と言っても京都の医大からは来てくれない状態ですから、手術もなかなかやりにくい。何でこんな辺鄙なところに障害のある子どもの施設を造ったんだと、疑問と腹立たしさを感じたものです。何を作るにしても、「誰のために」、「何をする」ためのものか、ということを考えれば、場所だって自ずと決まってくるんですね。

齋藤　誰のために、何をする所か、に象徴されるように、先生は一貫して現場主義ですね。

人間関係があってこその

齋藤　最後に、これからの福祉について、一言お願いします。

島田　米国のトルドー（⑦）という医師の墓石には、「ここに眠るトルドーは、生前、常に患者の友であり、しばしば慰め、時に医す」と、このような碑文が刻印されていると聞いています。私もそうありたいですね。いくら優れた医療技術を持っていても、「あんな医者のところへは二度と行かない」と言って来なかったら、その人は治らないわけですから。多少腕が悪くても、何でも聞いてくれる、友達のような医者なら、わからないから明日もう一度来てよ、と言ってもね。患者さんは「また先生わからんと言う。ちゃんと調べといてよ」と云いながらも治療に通いますよね。そんな関係が大切なんですね。特に慢性の病気や心身障害の方には大切です。福祉に携わる者にとっても同じだと思います。でも、これがなかなか難しくてね。

齋藤　あらためて、人と人ですね。本日は、ありがとうございました。

⑦トルドーさん・・・エドワード・リビングストン・トルドー。一八四八～一八七三。著名な結核医。